

私たちは自分の文化のあり方を正しいと考え、自分の文化を基準に相手の文化を批判することがあります。そのような態度を自文化中心主義と言います。授業では自文化中心主義にならないようにと学生に言いますが、簡単ではないようです。世界の様々な文化を見せますが、学生から「理解できません」、「その文化に生まれなくてよかったです」と感想が出ます。前回ネズミを食べる話を紹介しましたが、「ネズミを食べない日本に生まれてよかった」と多くの学生が感想を書きます。

私たちは幼い頃から自分たちの文化と外れたことをすると注意されてきましたから、それも仕方ないことかもしれません。例えば、私は子供の頃、美味しい料理があると皿をよく舐めていました。その度に両親から「汚いからやめなさい」ときつく言われました。ところがある文化では美味しかった時には皿まで舐めることが良いとされます。昔から皿を舐める行為を悪いと教え込まれた私は、皿を舐める、舐めないに善悪の絶対的な基準はないと理屈で知っていても、その画像を見た瞬間違和感を覚えました。



繰り返し注意され叩き込まれてきたため、自分たちの文化と異なる行為を見ると、頭で考える間もなく違和感を覚えてしまう、それが人間です。そのために「人間だったら同じものを見たら誰でも自分と同じ反応をする」と、それを疑うこともなく信じ、「普通はそんな

ことしないよ」と言ってしまうわけです。自分とは違う慣習を無意識に批判することは日本人だけでなく、どの国の人々誰にでもあります。このことを次回は、「場違い」という言葉からさらにお話したいと思います。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2013(平成 25)年 広報あきたかた 9 月号掲載